明野町埋蔵文化財発掘調査報告書第３集

灯火山古墳

確認調査報告書

1990－12

明野町教育委員会

灯火山古墳

確認調査報告書

序　文

わたしたちには，多くの先人の努力によって築かれそして引き継がれてきたいろいろな文化的遺産を今後とも大切に後々まで伝えていく責任があります。それは，伝統芸能や建造物，工芸品や埋蔵文化財などわたしたちの生活にとけ込みよく耳にするものがたくさんあります。
当報告書は，悠久の昔当地一帯に君臨した豪族の墳墓であることを確認するために調査した結果報告であります。調査につきましては，協和町教育委員会の方々をはじめ多くの有識者の絶大なる御協力によって成し遂げられたわけでありますが，それにしても地権者の深いご理解とご協力は申すまでもありません。
ここに，この報告が成るまでに多くの方々のご協力とご努力に厚く感謝申し上げまして巻頭のあいさつといたします。

平成２年12月

明野町教育委員会
教育長　髙松　武夫

目　次

序　文 …… i
例　言 …… ii
Ⅰ　調査の概要 …… 1
　1　調査にいたる経緯 …… 1
　2　本調査の概要 …… 3
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 4
Ⅲ　遺　構 …… 7
　1　地形測量 …… 7
　2　トレンチ …… 12
Ⅳ　遺　物 …… 13
Ⅴ　小　結 …… 16

図　版

PL－1　調査地
PL－2　調査地
PL－3　調査前
PL－4　調査前・トレンチ
PL－5　トレンチ
PL－6　トレンチ
PL－7　トレンチ・調査風景
PL－8　遺物

挿図目次

Fig1 遺跡位置図
Fig2 周辺遺跡分布図
Fig3 調査前
Fig4 調査風景
Fig5 調査官の指導
Fig6 トレンチ状況
Fig7 航空写真(1)
Fig8 航空写真(2)
Fig9 全体図・断面図
Fig10 墳丘削平状況図
Fig11 トレンチ配置図
Fig12 第1トレンチ西壁セクション図
Fig13 第2トレンチ西壁・北壁セクション図
Fig14 第3トレンチ西壁セクション図
Fig15 第4トレンチ西壁セクション図
Fig16 第5トレンチ西壁セクション図
Fig17 第6トレンチ北壁・東壁セクション図
Fig18 第7トレンチ北壁セクション図
Fig19 第8トレンチ東壁セクション図
Fig20 第9トレンチ西壁セクション図
Fig21 遺物実測図(1)
Fig22 遺物実測図(2)
Fig23 台畑古墳測量図
Fig24 灯火山古墳測量図

例　言

1　本書は，明野町教育委員会が平成2年度国庫補助事業として，平成2年4月28日から5月18日にかけて明野町大字村田1508，1509番地に所在する灯火山古墳での確認調査報告書である。
2　調査は，「灯火山古墳発掘調査会」を組織して事にあたった。
3　調査方法は，古墳の地形測量とトレンチ調査による層序の確認に主眼を置き，調査面積は約6,417m^{2}に及んだ。
4　本書の編集・執筆は瀬谷昌良が行なった。
5　現地での写真撮影及び遺物の撮影，遺物の実測・拓本，トレースについては瀬谷，阿久津久，安田厚子が分担して行なった。
6　本調査にあたり，下記の方々にご協力・ご支援をいただいた。記して厚く御礼申し上げます。

灯火山古墳発掘調査会
　会長　髙松武夫
　委員　青木信夫　大木正視　斉藤寛弐　新井包保　酒入 登　飯島庄一　谷口 俊
現地調査主任　瀬谷昌良
　調査副主任　阿久津久
　作業員　安田厚子　斉藤 新　片平雅俊　斉藤伸明　山野井哲夫　浅井哲也　鶴見貞雄
　　小林 優　堤恵美子　加納哲也　蓮沼祐子　渡辺孝男　阿久津司　関 博充
　　中里武一　塚田知市　横田友吉　中村正市　日向吉平
　測量協力者　飯島 茂　木村 茂　小島裕司
土地地権者　齋藤好雄
事務局　古橋四男　関口正行　藤沢重男　島田公夫　中島真一　北島喜惣治　鈴木操子
　　古宇田徳子　皆川昌造　入江敬三　中村美恵子　飯村正成　（順不同）

Ⅰ　調査の概要

1　調査に至る経緯

灯火山古墳は，町の北西端で県道下館・筑波線の東側台地上に位置し，全体に瓢箪形をなす大型の古墳である。

今回の調査は，以下のような経緯により調査が実施された。

昭和63年12月，町内の文化財識者から町教育委員会へ古墳削平・竹林伐採の工事を実施しているとの連絡があった。町教育委員会は，ただちに文化財の保護上工事の中止を指示するとともに古墳の保護・保存方法について所有者と協議を重ねる。

その結果，所有者は遺跡として承認したわけではないので，現状保存も古墳の発掘調査費用も負担できないと主張，一方県の重要遺跡調査報告書ならびに県遺跡地名表（遺跡番号2219）へ掲載されている周知の遺跡であるとする町当局と見解の相違が生じた。

平成元年８月25日，町教育委員会は，「遺跡の範囲・性格」を把握していないこともあり，古墳の確認調査を実施することで所有者と合意する。

平成２年１月，県文化課の指導により文化財関係補助金に係る事業計画書を提出すると同時に町一般会計予算（案）を作成。さらに４月２日文化財保護法第98条の２の規定に基づき，文化庁長官あて発掘通知書を進達。

４月17日，発掘調査会を設置し調査主任の内諾を得る。

４月25日，町文化財保護審議会，発掘調査会を開催し，調査に至る経過・調査内容などについて説明・協議する。

審議会では全員一致で諮問どおり答申し，多くの方々のご協力を受け，４月28日から発掘調査を開始することになった。

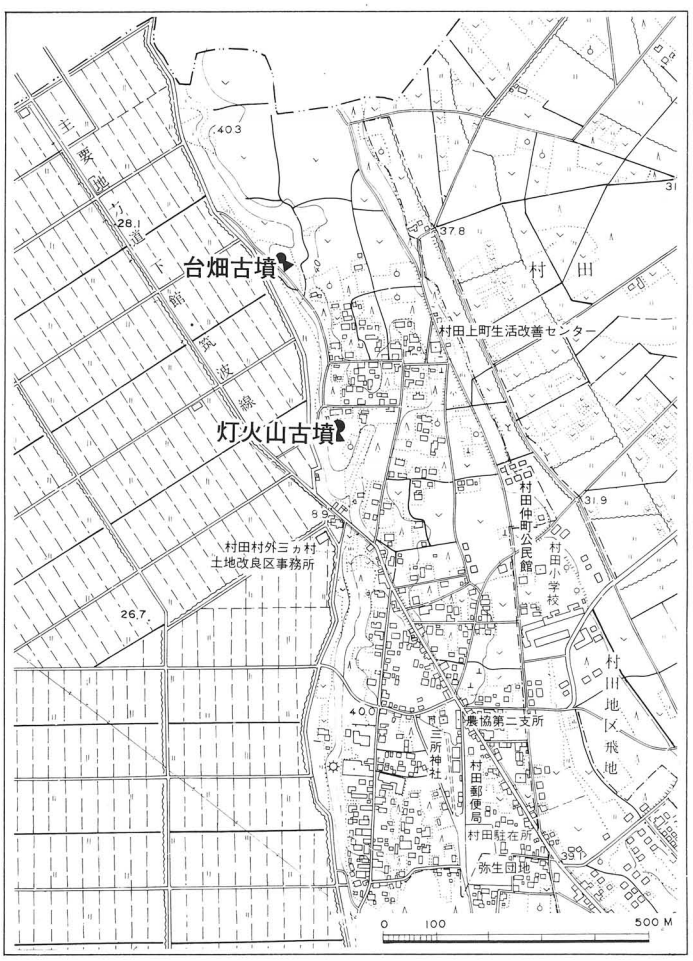
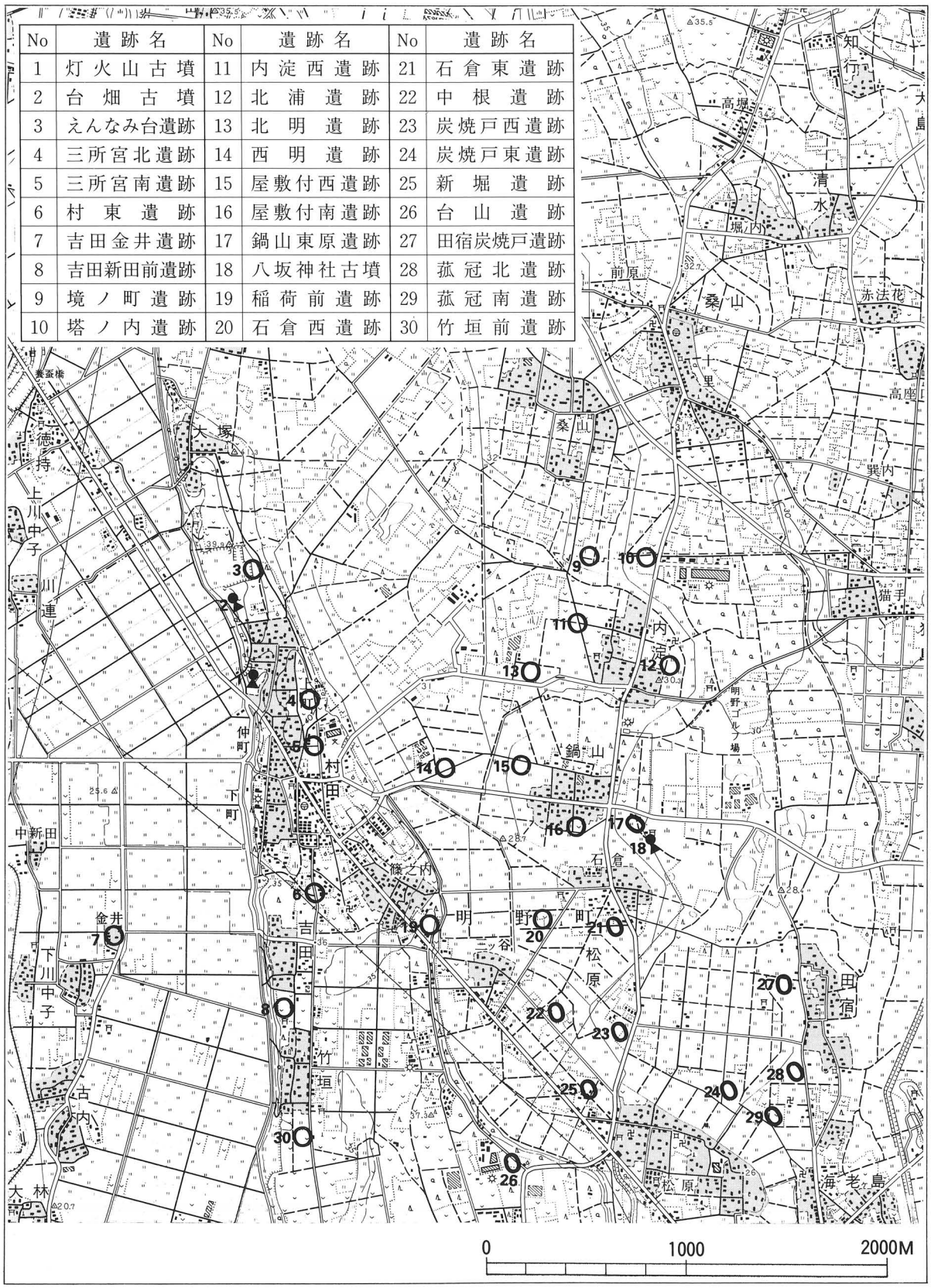


Fig. 1　遺跡位置図



No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1	灯火山古墳	11	内淀西遺跡	21	石倉東遺跡
2	台畑古墳	12	北浦遺跡	22	中根遺跡
3	えんなみ台遺跡	13	北明遺跡	23	炭焼戸西遺跡
4	三所宮北遺跡	14	西明遺跡	24	炭焼戸東遺跡
5	三所宮南遺跡	15	屋敷付西遺跡	25	新堀遺跡
6	村東遺跡	16	屋敷付南遺跡	26	台山遺跡
7	吉田金井遺跡	17	鍋山東原遺跡	27	田宿炭焼戸遺跡
8	吉田新田前遺跡	18	八坂神社古墳	28	菰冠北遺跡
9	境ノ町遺跡	19	稲荷前遺跡	29	菰冠南遺跡
10	塔ノ内遺跡	20	石倉西遺跡	30	竹垣前遺跡

Fig. 2　周辺遺跡分布図　（明野町史編さん委員会『明野町の遺跡と遺物』昭和58年より作成）

2　本調査の概要（PL　1～4）

遺跡は，現状が山林・竹林となっており，これまでに詳細な調査の手を拒んでいたが，このたびの開発行為によってその全容をうかがい知る機会を得た。今回の調査には，調査参加者はもとより地主である齋藤好雄氏の調査に対する深いご理解とご支援によるところが大であることをここに記して感謝申し上げる次第であります。

調査は，第一に墳丘の詳細な測量図を作成することに努めた。それは，既に墳丘の一部が削平を受けておりその旧状を失していることや，『重要遺跡調査報告書Ⅰ』（昭和57年３月　茨城県教育委員会）に記載されているように，県内でも数少ない前方後円墳を再認識する意味をも持ち合わせている。

第二に，本遺跡が古墳であることを把握するために最小限のトレンチ調査によって解明することにある。このことは，既に後円部の北半部分が宅地の庭先として大きく削りとられ，また，近年にも後円部の中央が南北に深く（最深部で約2.5～3㍍）削平されており，同時にトレンチの設定もこの削平部分を中心として実施することにより遺跡の破壊を最小限にとどめるとともに，確認調査の実施を容易に進めることとした。

トレンチは，幅１㍍を原則として主軸方位（南北）に，さらには調査地の制約により前方部と後円部の西側斜面にそれぞれ設定して，墳丘の状況や古墳の規模・周溝の確認に努めた。また，広範囲にわたって削平を受けた前方部（南側）と後円部（北側）には文化庁調査官の指示を受けトレンチ，ボーリング調査を実施し，最終調査面積は約6,417m^{2}となった。

本調査によって，当遺跡は古墳であることは明確となり，しかも，その立地・墳形などの点から見ても茨城県内でも有数の前期古墳の様相を呈していることが判明した。また，出土遺物の多くは表採ではあるが，古式土師器の確認とその他多くの弥生土器の検出など今後に残された課題は多い。

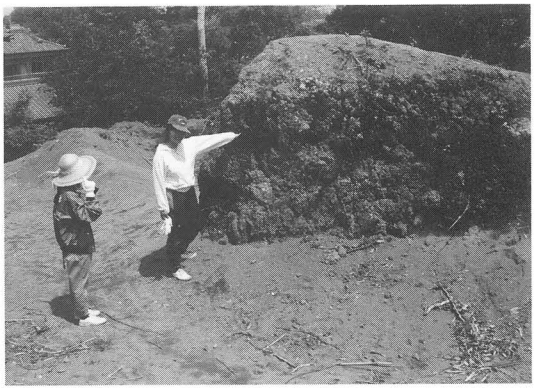


Fig. 3　調査前（後円部墳頂付近）

Fig. 4　調査風景

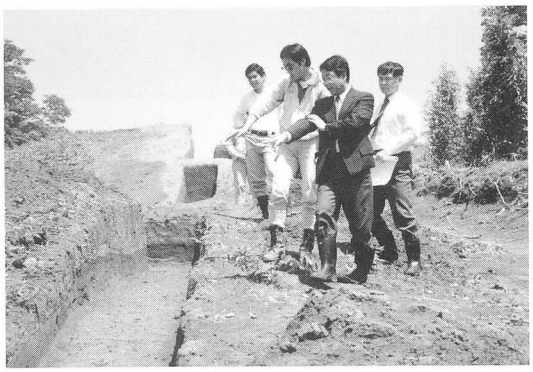


Fig. 5　調査官の指導

Fig. 6　トレンチ状況（北から）

Fig. 7　航空写真(1)　1949年撮影：日地サク証 第020516003号

Ⅱ　遺跡の位置と環境

灯火山古墳は，小貝川によって形成された沖積低地を西に望む洪積台地の縁辺部に立地する。低地との比高差は約７㍍を測り，北へ約300㍍離れた台畑古墳とともに町内では数少ない前方後円墳である。また，早くから周知された遺跡（茨城県遺跡番号2219，明野町遺跡番号２）でもあり，県内でも有数の大型の古墳である。

周辺の遺跡は，この洪積台地を中心として台地縁辺部や台地上に広く分布し（Fig. 2 参照），特に古墳時代から奈良・平安時代にかけての包蔵地が多く見られる（えんなみ台遺跡，三所宮南遺跡，村東遺跡，吉田金井遺跡，吉田新田前遺跡，境ノ町遺跡，内淀西遺跡，北浦遺跡，西明遺跡，鍋山東原遺跡，稲荷前遺跡，石倉西遺跡，石倉東遺跡，中根遺跡，台山遺跡）。また，弥生時代の遺跡では，えんなみ台遺跡が知られ，縄文時代では，えんなみ台遺跡，塔ノ内遺跡，鍋山東原遺跡，台山遺跡が所在する。

Fig. 8　航空写真(2)　　1989年撮影：アクリーグ株式会社

明野町における古墳の分布は，既に詳細な踏査によって現存する古墳16基と消滅した古墳14基の所在が知られている（『明野町史』昭和60年　明野町史編さん委員会）。その中において，現存する古墳で墳形の判明する前方後円墳３基（台畑古墳，灯火山古墳，宮山観音古墳）と円墳10基は明野町の古墳文化をうかがい知る貴重な存在となってしまった。

また，同じ小貝川左岸台地の縁辺部に立地する古墳（群）は，この村田古墳群（台畑古墳，灯火山古墳）の他に南方約２・５キロメートルの地点に藤塚古墳群（守子塚，鎧塚，稲荷塚，富士塚，人見塚，浅間塚，台ノ上および名称不明１基の計８基が所在したが，現在ではすべて湮滅している）が所在し，さらにその南方約１キロメートルには鷺島古墳群（円墳２基，ともに湮滅）が所在していた。いずれもその規模や墳形，埋葬施設，副葬品など詳細は不明である。しかし，藤塚古墳群からは直刀・鉄鏃・耳環・刀子，鷺島古墳群からは埴輪（人物・動物・円筒）が出土している。時期的には，いずれもが村田古墳群より後出する古墳時代後期に属するものと思われる。なお，本古墳（灯火山古墳）からは，明治38年の県道拡張工事の際に前方部の突端付近から直刀が出土したとされているが詳細は不明である。

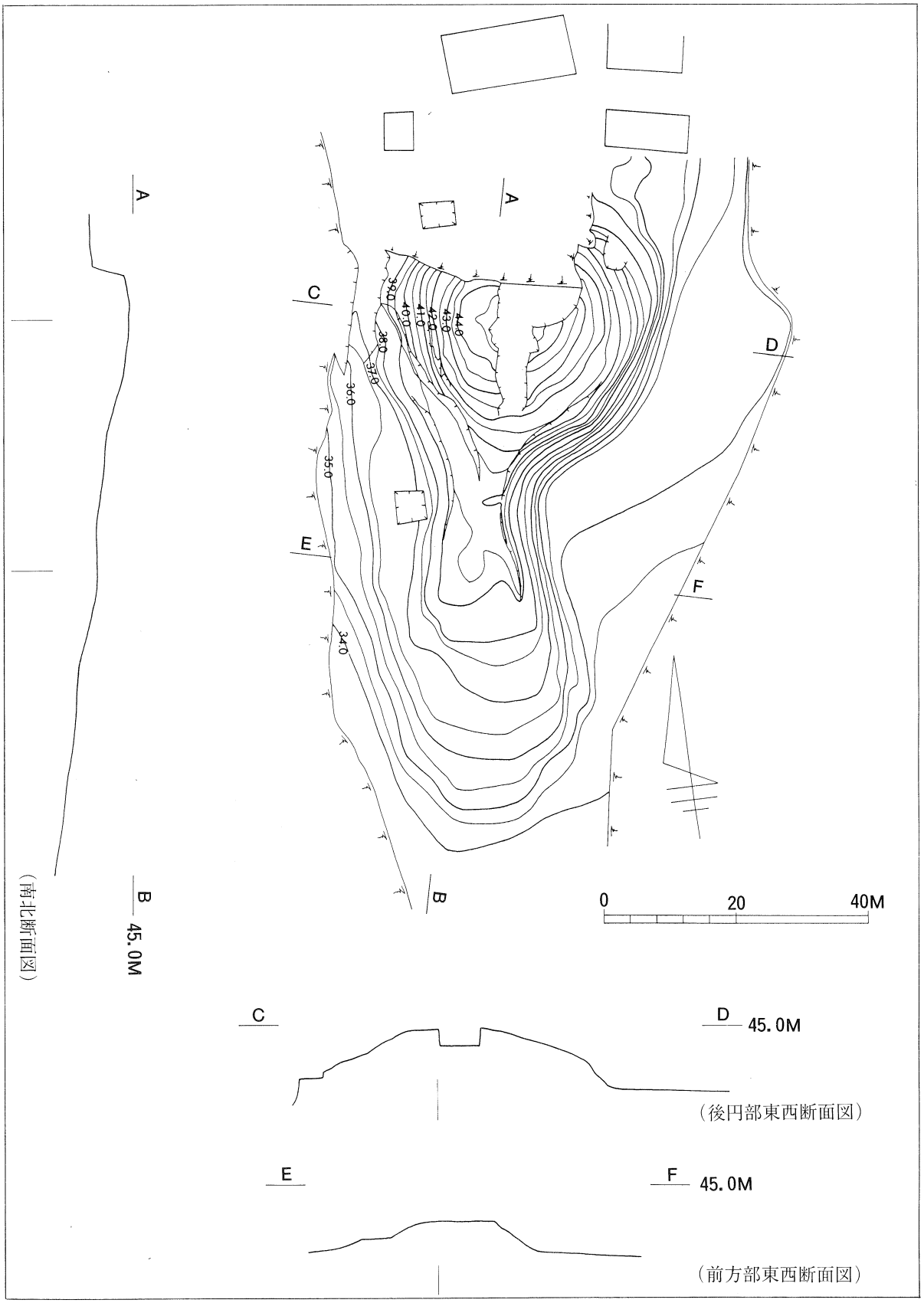

A
A
C
D
E
F
B
B
39.0
40.0
41.0
42.0
43.0
44.0
38.0
37.0
36.0
35.0
34.0
0
20
40M
(南北断面図)
45.0M
C
D
45.0M
(後円部東西断面図)
E
F
45.0M
(前方部東西断面図)

Fig. 9　全体図・断面図

Ⅲ 遺 構

1 地形測量

遺跡は,その後円部の北側部分が既に早く(明治期かそれ以前)に削平されて,宅地の庭先となっていた。また,調査に及ぶにあたっては,既に山林・竹林は切り開かれ,重機による削平が進んでいた(Fig. 10)。特に後円部中央付近と前方部の削平には痛々しいほどであった。調査は速やかに墳丘測量を行ない,その全容を把握するに至った(Fig. 9)。古墳は,南北に延びる洪積台地の西側縁辺部に,ちょうど町の西側を流れる小貝川と並行し対岸を威圧するかのようにほぼ南北に築造されている。低地から望めば,後円部の高さはらくに10㍍を越えるくらいに見間違えるほどの墳丘を築いている。それはまさしく墳丘測量の結果によって示されている。墳丘は,広範囲にわたって削平を受けているとはいえ標高37㍍ラインにおいて見事な前方後円形を形作っている。墳丘の東側一帯(前方部の東斜面から後円部の東斜面にかけて)は旧状をよく残し,西側もかろうじて旧状をとどめていた。後円部の北半部も図上での復元を可能にしている。

本古墳は,全長約70㍍,後円部径約46㍍,後円部高さ約8㍍,前方部幅約22㍍,前方部高さ約2.5㍍を測る前方後円墳を推測することが出来る。また,前方部は後円部に比べて幅が狭く高さも低いことや,地形を最大限に利用して構築した状況がよみ取れるものである。

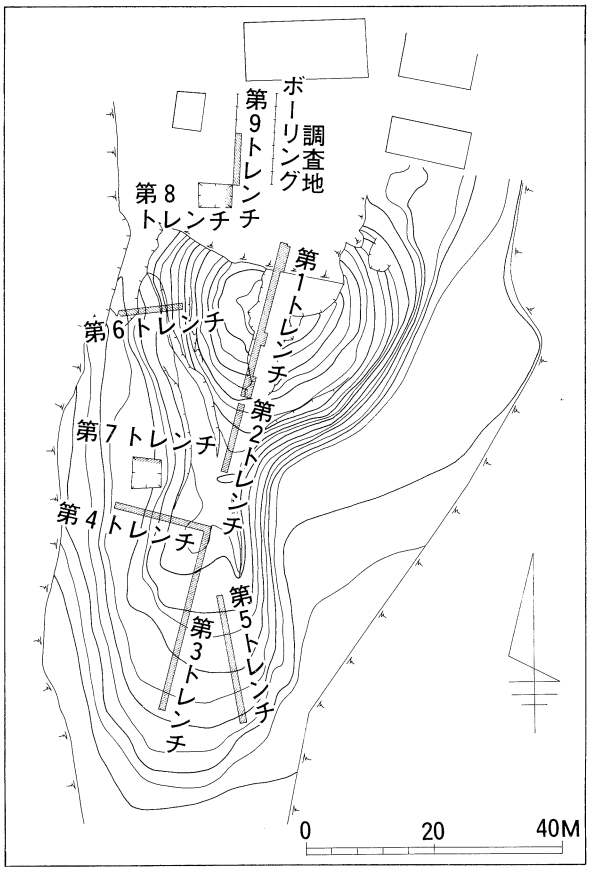


Fig. 11 トレンチ配置図

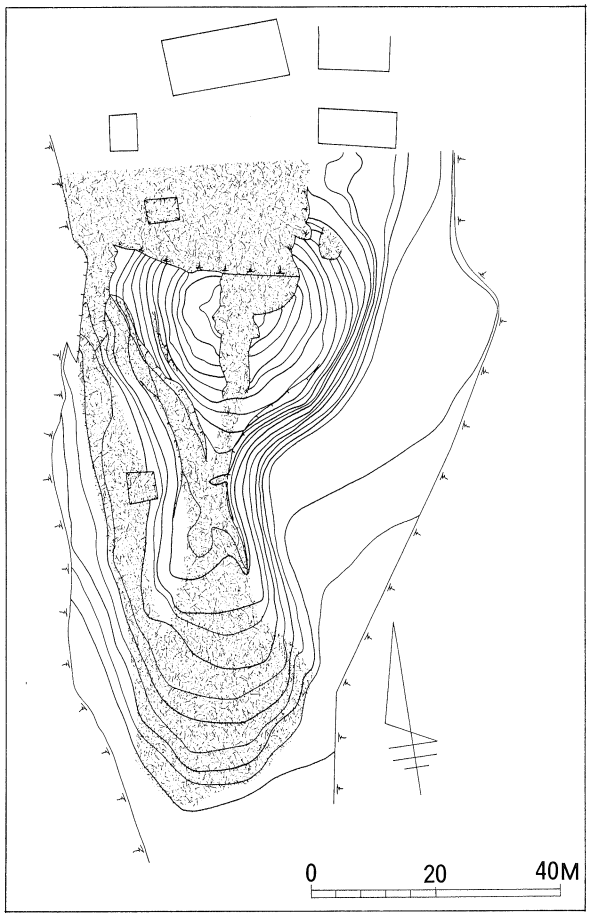


Fig. 10 墳丘削平状況図

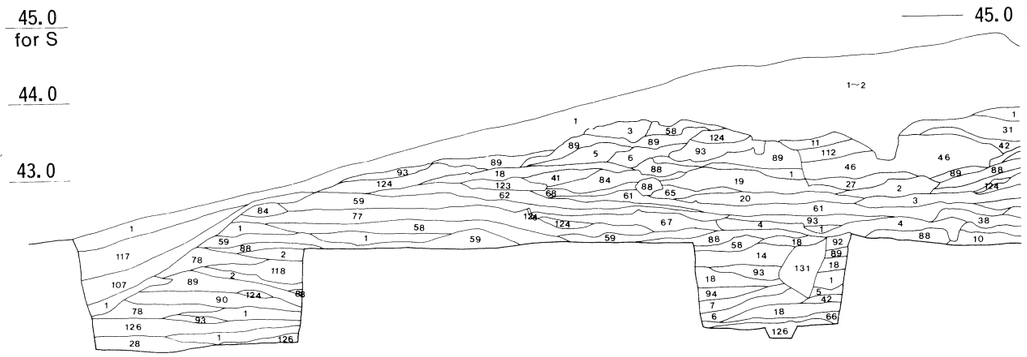
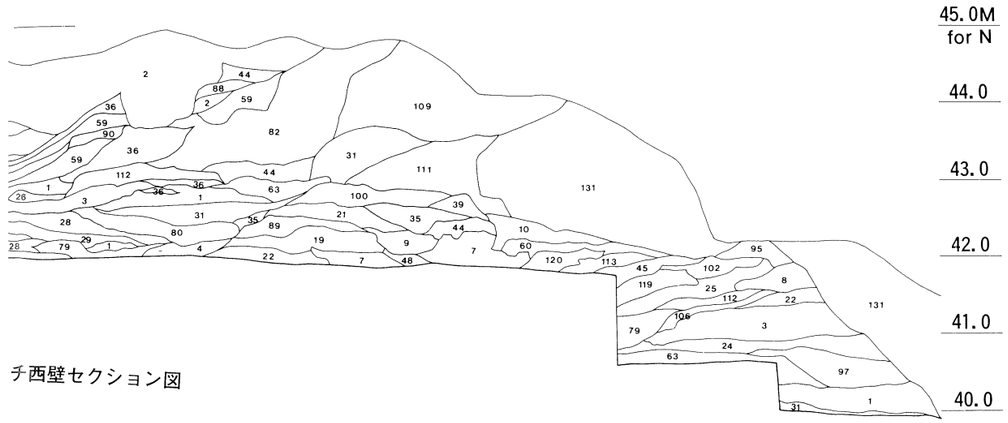


Fig. 12　第1トレンチ西壁セクション図



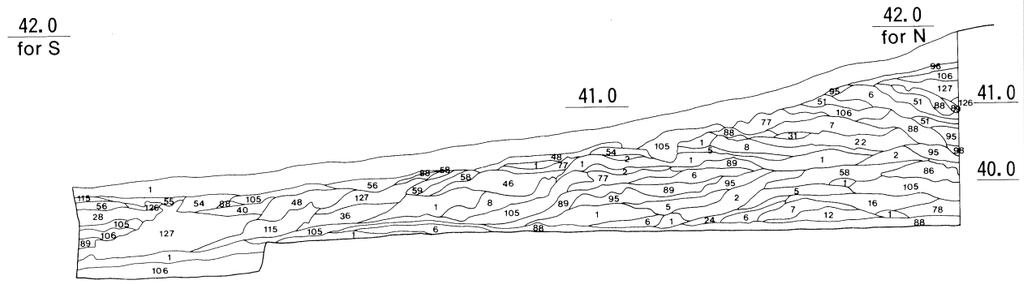


Fig. 13　第2トレンチ西壁・北壁セクション図

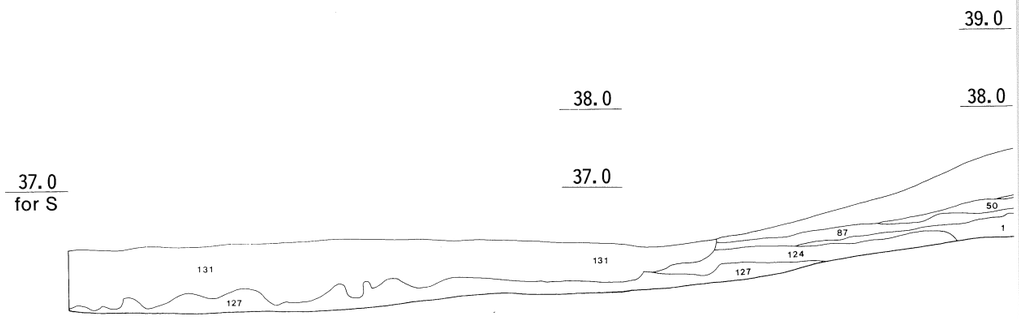
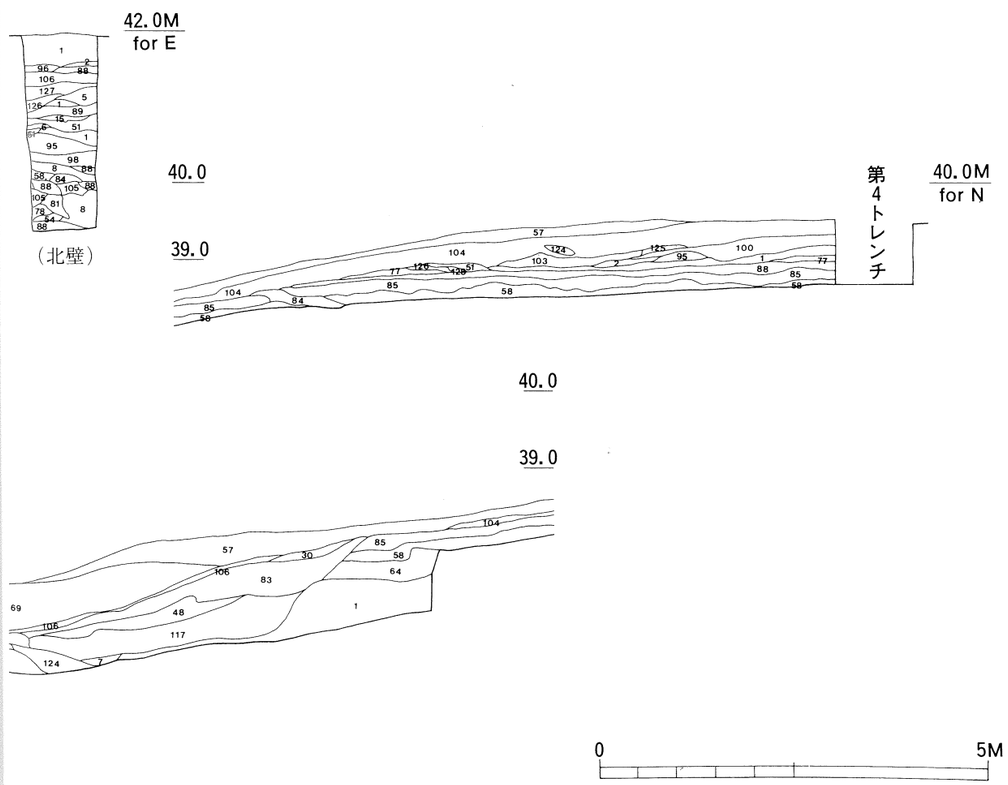


Fig. 14　第3トレンチ西壁セクション図



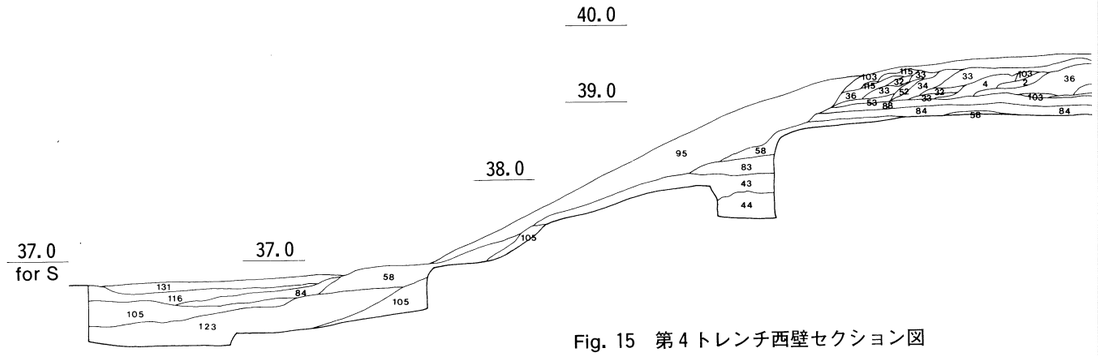


Fig. 15　第4トレンチ西壁セクション図

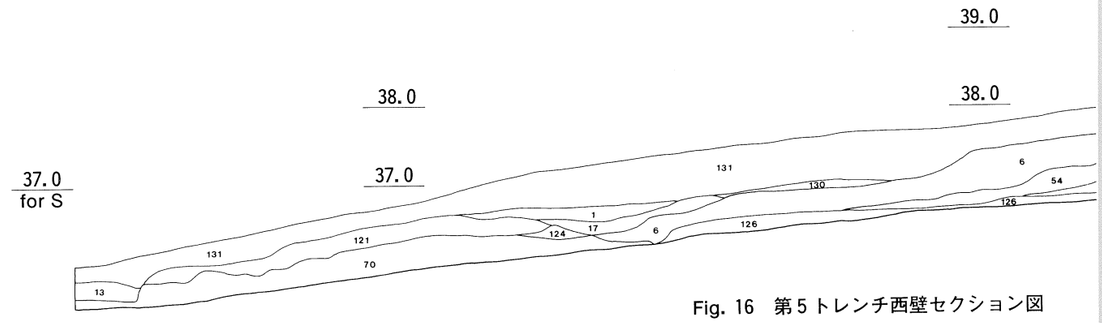


Fig. 16　第5トレンチ西壁セクション図

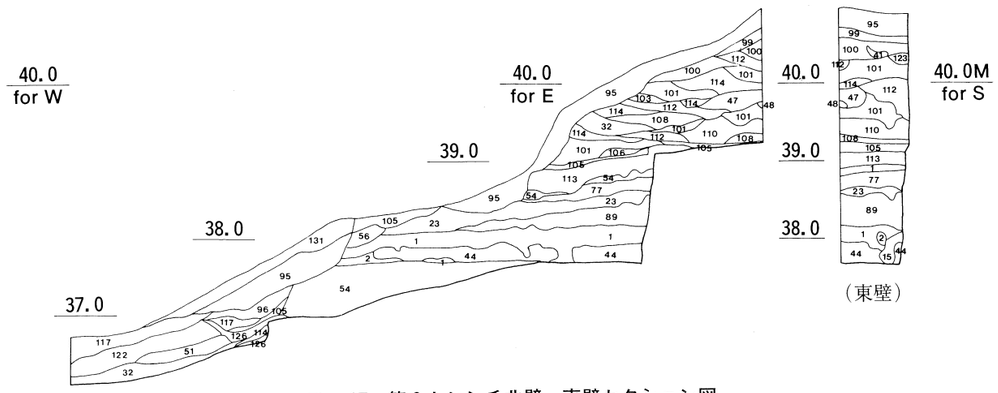


Fig. 17　第6トレンチ北壁・東壁セクション図

番号	土層名	備考	番号	土層名	備考
1	暗黄褐色土		67	明黄褐色土，褐色土	
2	暗黄褐色土，鹿沼土		68	明黄褐色土，黒褐色土	
3	暗黄褐色土，鹿沼土，明褐色ブロック土		69	淡褐色土，淡灰白色粘土，小砂利	
4	暗黄褐色土，鹿沼土，黒色土		70	黄橙砂層	
5	暗黄褐色土，明褐色ブロック土		71	淡灰白色土	粘質
6	暗黄褐色土，黒色土		72	黄橙色土	粘質
7	暗黄褐色土，淡黄褐色ブロック土		73	淡灰白色土，黄橙色土	
8	暗黄褐色土，鹿沼土		74	暗灰白色土	
9	暗黄褐色土，鹿沼土，茶褐色ブロック土		75	暗黄白色土	
10	暗黄褐色土,鹿沼土,淡灰白色粘土,淡橙色粘土		76	暗黄灰色土	
11	暗黄褐色土，茶褐色ブロック土		77	黄褐色土	
12	暗黄褐色土，淡褐色土		78	黄褐色土，黒色土	
13	暗黄褐色土，暗茶褐色土		79	黄褐色土，黒色土，淡灰白色粘土	
14	暗黄褐色土，明黄褐色土，黒黄褐色土		80	黄褐色土，明褐色ブロック土	
15	暗黄褐色土，黄褐色ブロック土		81	黄褐色土，黒黄褐色土	
16	暗黄褐色土，黄褐色土		82	黄褐色土，暗褐色土，鹿沼土	
17	暗黄褐色土，淡黒黄褐色土		83	黄褐色土，黒色粒子	
18	暗黄褐色土，黒黄褐色土		84	淡黒黄褐色土	
19	暗黄褐色土，黒黄褐色土，黄褐色土		85	淡黒黄褐色土，黒色粒子	
20	暗黄褐色土，黒黄褐色土，黒色土		86	淡黒黄褐色土，明褐色ブロック土	
21	暗黄褐色土，黒黄褐色土，鹿沼土		87	淡黒黄褐色土，淡灰白色粘土	
22	暗黄褐色土，褐色土，黒色粒子		88	黒黄褐色土	
23	暗黄褐色土，暗褐色土		89	黒黄褐色土，黄褐色土	
24	暗黄褐色土，暗褐色土，黒色粒子		90	黒黄褐色土，黄褐色土，淡灰白色粘土	
25	暗黄褐色土，暗褐色土，鹿沼土		91	黒黄褐色土，黒色土	
26	暗黄褐色土，淡茶褐色土		92	黒黄褐色土，鹿沼土	
27	暗黄褐色土，黒褐色土		93	黒黄褐色土，淡灰白色粘土	
28	暗黄褐色土，淡灰白色粘土		94	黒黄褐色土，淡灰白色粘土，淡橙色粘土	
29	暗黄褐色土，白色粘土		95	褐色土	
30	暗黄褐色土，白色粘土		96	褐色土，黒色粒子	
31	明褐色ブロック土		97	褐色土，明褐色ブロック土	
32	淡明褐色土		98	褐色土，黒色土	
33	淡明褐色土，淡灰白色粘土		99	褐色土，淡黄褐色ブロック土	
34	淡明褐色土，淡灰白色粘土，淡橙色粘土		100	褐色土，鹿沼土	
35	明褐色ブロック土，鹿沼土		101	褐色土，暗褐色土	
36	明褐色ブロック土，淡灰白色粘土		102	褐色土，淡茶褐色土	
37	黒色土		103	褐色土，淡灰白色粘土	
38	黒色土，淡黄褐色ブロック土		104	褐色土，淡灰白色粘土，小砂利	
39	黒色土，鹿沼土		105	暗褐色土	
40	黒色土，淡灰白色粘土，淡橙色粘土		106	暗褐色土，黒色粒子	
41	淡黒褐色土		107	暗褐色土，黒色粒子，淡灰白色粘土	
42	淡黄褐色ブロック土		108	暗褐色土，明褐色ブロック土	
43	淡黄褐色土		109	暗褐色土，明褐色ブロック土，鹿沼土	
44	鹿沼土		110	暗褐色土，黒色土	
45	鹿沼土，茶褐色ブロック土		111	暗褐色土，黒色土，鹿沼土	
46	鹿沼土，淡褐色土		112	暗褐色土，鹿沼土	
47	鹿沼土，明茶褐色土		113	暗褐色土，淡茶褐色土	
48	茶褐色ブロック土		114	暗褐色土，淡灰白色粘土	
49	茶褐色土		115	暗褐色土，淡灰白色粘土，淡橙色粘土	
50	茶褐色ブロック土，淡灰白色粘土		116	暗褐色土，白色粘土	
51	淡褐色土		117	淡茶褐色土	
52	淡褐色土，淡灰白色粘土		118	淡茶褐色土，黒色土	
53	淡褐色土，淡灰白色粘土，淡橙色粘土		119	淡茶褐色土，明褐色ブロック土	
54	暗茶褐色土		120	淡茶褐色土，淡黄褐色ブロック土	
55	暗茶褐色土，淡灰白色粘土		121	淡茶褐色土，淡灰白色粘土	
56	明茶褐色土		122	淡茶褐色土，小砂利	
57	暗褐色土，白色粘土混入		123	黒褐色土	
58	明黄褐色土		124	淡灰白色粘土	
59	明黄褐色土，鹿沼土		125	淡灰白色粘土，小砂利	
60	明黄褐色土,鹿沼土,黒色土,茶褐色ブロック土		126	淡灰白色粘土，淡橙色粘土	
61	明黄褐色土,鹿沼土,淡黄褐色ブロック土		127	淡灰白色粘土,淡橙色粘土,淡黄褐色粘土	
62	明黄褐色土，鹿沼土，褐色土		128	淡黄褐色粘土	
63	明黄褐色土，鹿沼土，暗褐色土		129	白色粘土	
64	明黄褐色土，鹿沼土		130	炭灰層	
65	明黄褐色土，黒黄褐色土		131	撹乱	
66	明黄褐色土，黒黄褐色土，淡灰白色粘土				

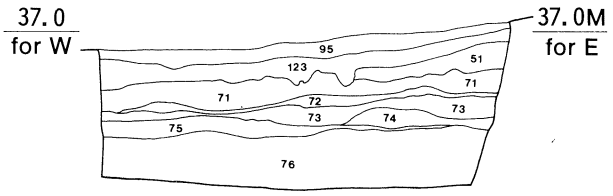


Fig. 18　第7トレンチ西壁セクション図

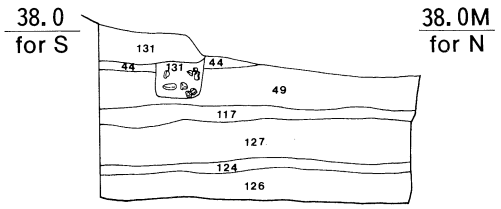
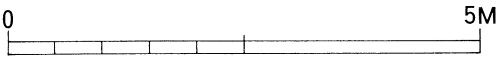


Fig. 19　第8トレンチ東壁セクション図

Fig. 20　第9トレンチ西壁セクション図



2　トレンチ（PL 4～7）

トレンチの設定（Fig. 11）は，後円部のほぼ中央に削平された部分が古墳の主軸と一致するために，このラインを延長して主軸トレンチとした。主軸トレンチには，後円部に幅1㍍，長さ24.9㍍を第1トレンチ，後円部から前方部に変換するくびれ部上に幅1㍍，長さ11㍍を第2トレンチ，前方部上から南裾部分にかけて幅1㍍，長さ29.6㍍を第3トレンチとして設定した。また，この第3トレンチに直交するように前方部上から西側斜面にかけて幅1㍍，長さ15.5㍍を第4トレンチとし，さらには同じ前方部の南東部分に幅1㍍，長さ20㍍を第5トレンチとして設定した。後円部には，その西側斜面上から裾部分にかけて幅1㍍，長さ10㍍を第6トレンチとした。なお，当地の開発に際して重機による焼却穴が2箇所掘られていた。これらの穴は，ともに台地の地山層を深く掘り込んだもので今回の調査に利用させていただいた。一ヶ所は，西側くびれ部の裾付近でありその北壁の土層状況を第7トレンチとして，もう一ヶ所は，後円部の北西部でその東壁の土層状況を第8トレンチとした。さらには，この第8トレンチを延長する形で，後円部の痕跡や周溝の存在を確認するために幅1㍍，長さ8㍍を設定して第9トレンチとした。

第1トレンチ（Fig. 12）においては，後円部中央の削平された西壁をベースとして掘り下げを行なった。基底面（地山層）までの確認には至らなかったが，部分的に約2㍍まで深掘りを行ない土層状況を確認した。その結果，基本的には黒色土・黄褐色土の互層であり，部分的に白色粘土・鹿沼土ブロック土の混入など多彩な変化を見せている。層序は，南半部でレンズ状にほぼ平行積みとし，北半部ではやや乱れている。墳頂付近においては壁面の風化が著しく，土層の細分には至らなかったが，広範囲にわたる乱れを感じ取れるものであった。また，この後円部の西半部の墳頂には幅1～2㍍の範囲に多量の小円礫が散乱していた。後円部の北側約3分の1は既に湮滅しており，現在はその撹乱土（切り崩し土）が残土としてまた，墳丘土が風化して流れだしている。

第2トレンチ（Fig. 13）は，後円部と前方部の変換点（くびれ部）を中心とし，北側の後円部側で約3㍍，南側の前方部で約2㍍まで掘り下げて地山層までを確認した。その結果，黒色土や黄褐色土を基調とする互層ではあるが，後円部から徐々に広がりを示しつつ積み上げている状況を把握した。

また，変換点（くびれ部）付近には厚い白色粘土の堆積を確認した。同トレンチにおいては，標高約39.5㍍上に地山層である黒色土とローム土を検出した。この黒色土中からは，唯一のトレンチ内出土遺物として弥生土器片２点を検出している。

第３トレンチ（Fig. 14）は，前方部の裾部と周溝の有無についてを主とした。その結果，標高約37㍍付近で前方部の裾の立ち上がりを確認した。裾部は地山（ローム層）を削りだしており，旧表土である黒色土の上には黄褐色土や白色粘土をレンズ状に積み上げている。また，周溝についてはその存在を肯定するものではなかった。

第４トレンチ（Fig. 15）は，前方部の西半部の状況を明らかとした。それは，旧表土である黒色土の上に黄褐色土や白色粘土をレンズ状に積み上げ，特に斜面付近においては粘質土を多用していることが判明した。また，標高約39㍍以下は地山層であるが，丹念に標高約37㍍まで削りだしていることがわかった。同トレンチにおいても周溝は確認できなかった。

第５トレンチ（Fig. 16）は，第３トレンチとともに前方部の裾と周溝確認のために設定したものである。その結果，第３トレンチと同様に標高約37㍍付近で裾部の立ち上がりを確認した。裾は，地山（ローム層）を削りだしていることや重機によって削平された土砂の堆積が広範囲にわたって特に南側に集中していることを確認した。また，周溝を確認するには至らなかった。

第６トレンチ（Fig. 17）は，後円部の斜面から裾部にかけての状況を調査したものである。その結果，標高約39㍍付近に旧表土を確認し，この上に後円部の盛り土がなされていることが判明した。盛り土はレンズ状に互層積みとなっており，部分的に白色粘土や鹿沼土ブロックを混入した土塊を積み上げている。また，地山の削りだしは標高約37㍍付近から始まっていることを確認した。周溝については確認できなかった。

第７トレンチ（Fig. 18）と第８トレンチ（Fig. 19）は，ともにその層序は地山層そのものであり人為的な変化を認めるものではなかった。

第９トレンチ（Fig. 20）は，第８トレンチをさらに北に延長して後円部の周溝を調査するために設定した。その結果，部分的に後世の撹乱を見いだしたものの，古墳の周溝を確認するには至らなかった。さらには，同トレンチを中心として２㍍間隔で12ヶ所のボーリング調査を試みたが，結果は同じでローム層を確認したに過ぎなかった。

Ⅳ　遺　物（PL 8）

本調査によって得られた遺物のほとんどは表採資料であるが，わずかに弥生土器（Fig. 22－16）のみがトレンチ内の黒色土中（旧表土）よりの出土である。出土遺物は，縄文土器（４点），石製品（３点），弥生土器（20点），土師器（13点）で総数40点を数えるがそのほとんどが小破片であるために図化しがたいものであった。縄文土器（Fig. 21－１～４）と石製品（Fig. 21－５～７）は縄文時代中期を主とするものであり，弥生土器（Fig. 22－１～18）は弥生時代後期のものである。土師器（Fig. 22－19）は，前方部の西斜面において表採された古式土師器（五領期）の壷形土器である。頸部は直立気味に立ち上がり，口縁部はラッパ状に大きく外反する。本古墳の時期推定には有力な資料である。

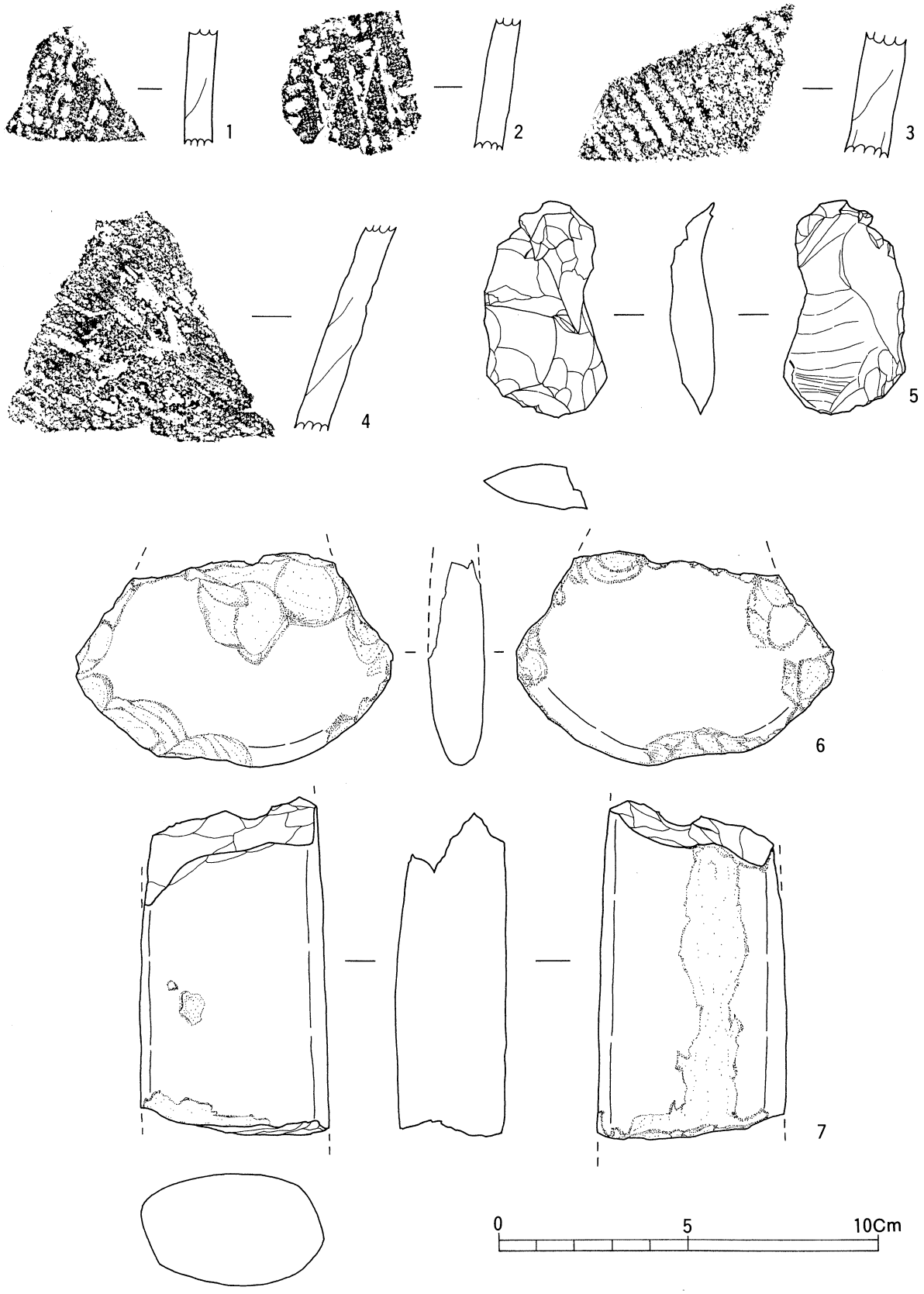


Fig. 21　遺物実測図(1)

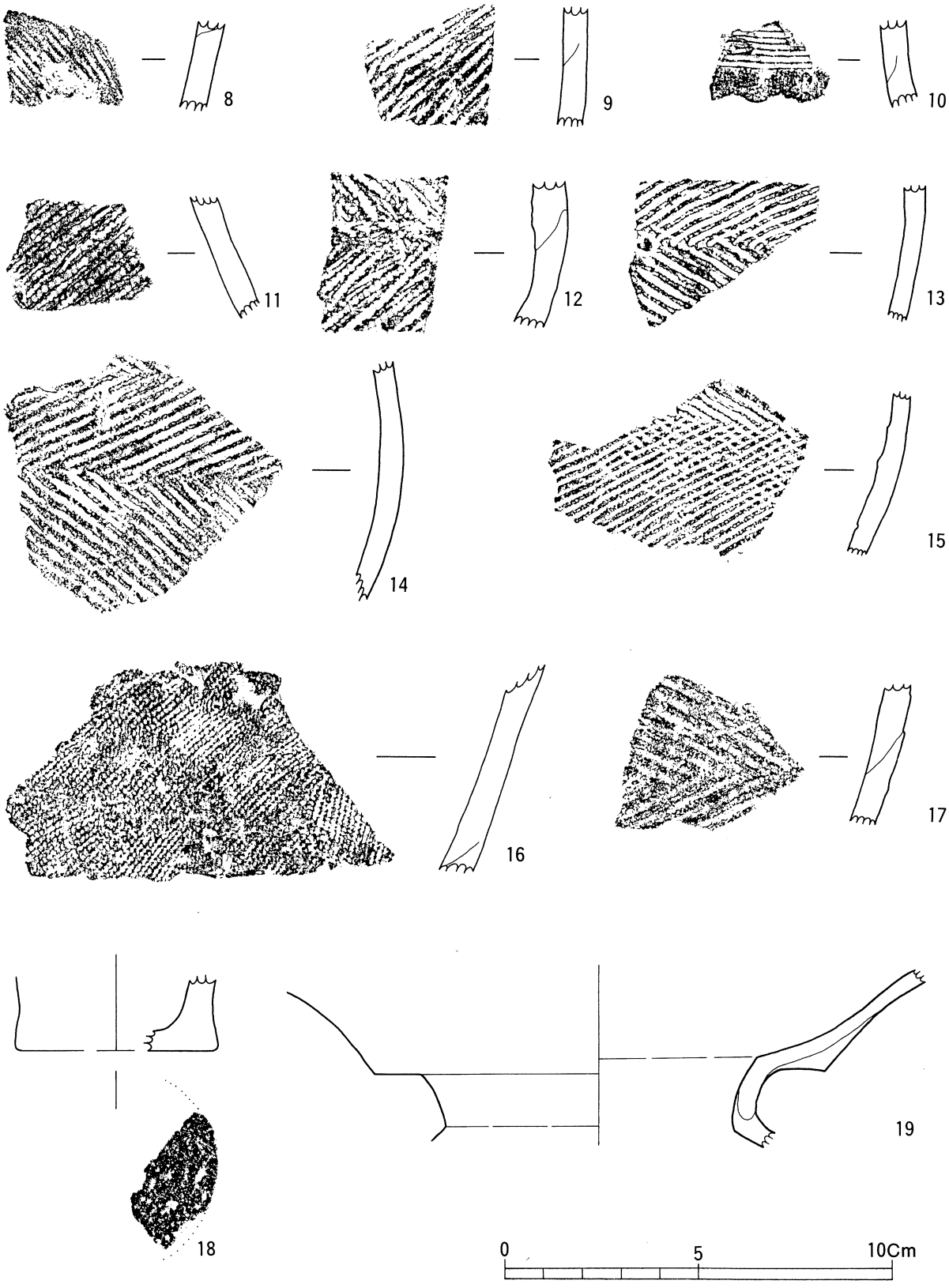


Fig. 22　遺物実測図(2)

V 小 結

今回の調査によって，本古墳の全体像を把握することが出来た。それは，県西地域において全長約70㍍を測る前方後円墳の存在と，しかも台地縁辺部の自然地形を有効に利用した古墳の築造技術を垣間見ることが出来た。古墳は，前方部において標高約39㍍付近から１㍍前後の盛り土を行ない，後円部においてもやはり標高約39㍍付近から約６メートル前後の盛り土が考えられるものである。これらの盛り土は，墳丘の基底面を整形した切り土や古墳の東西に見られる全形の整形（台地の掘削など）によったものと思われる。特に，東側の地形からは強く感じとれるものがある。また，後円部に比べて前方部が未発達であり周溝を持たないこと，築造技術の観点，遺物の状況などにより本古墳には古墳時代前期末～中期初頭の様相を強く受けとれるものである。また，北に隣接する台畑古墳（Fig. 23）よりも先行することは確かであろう。

本古墳の時期決定には，埋葬施設の問題などもあり速断しがたいものがあるが，後円部の墳頂部に散乱する小円礫などには注目したいものがある。しかし，現状ではその可能性が少なくなっていることは歪めない事実である。

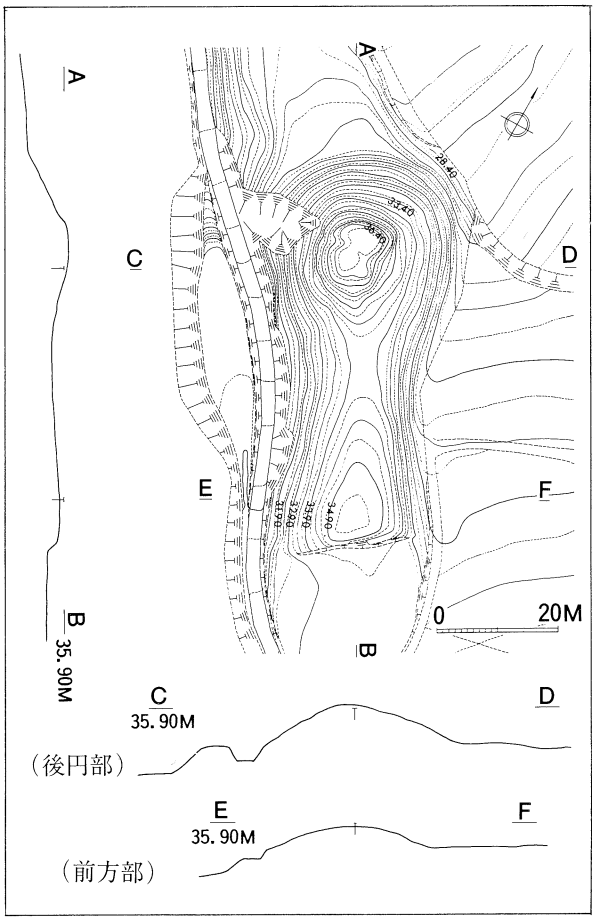


Fig. 23　台畑古墳測量図（昭和60年測量）

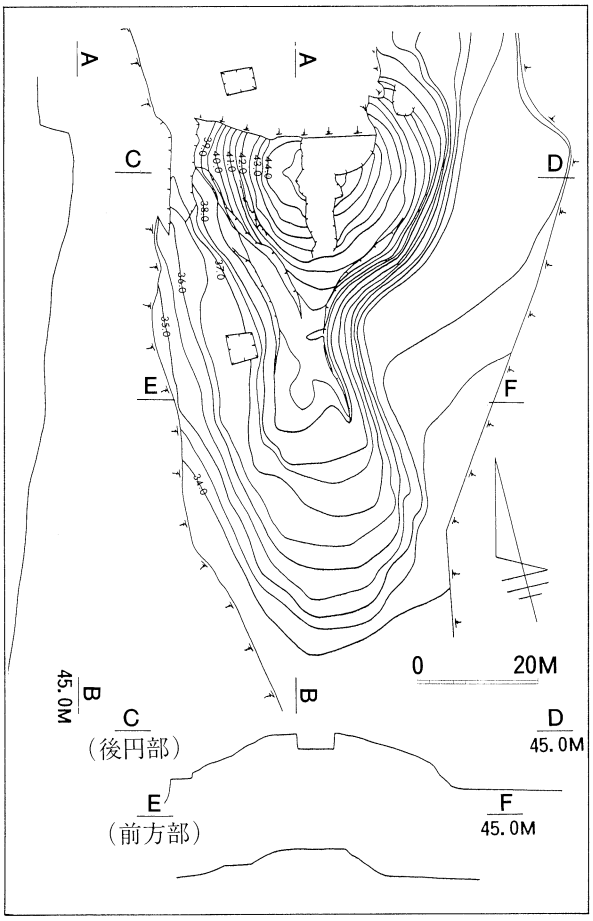
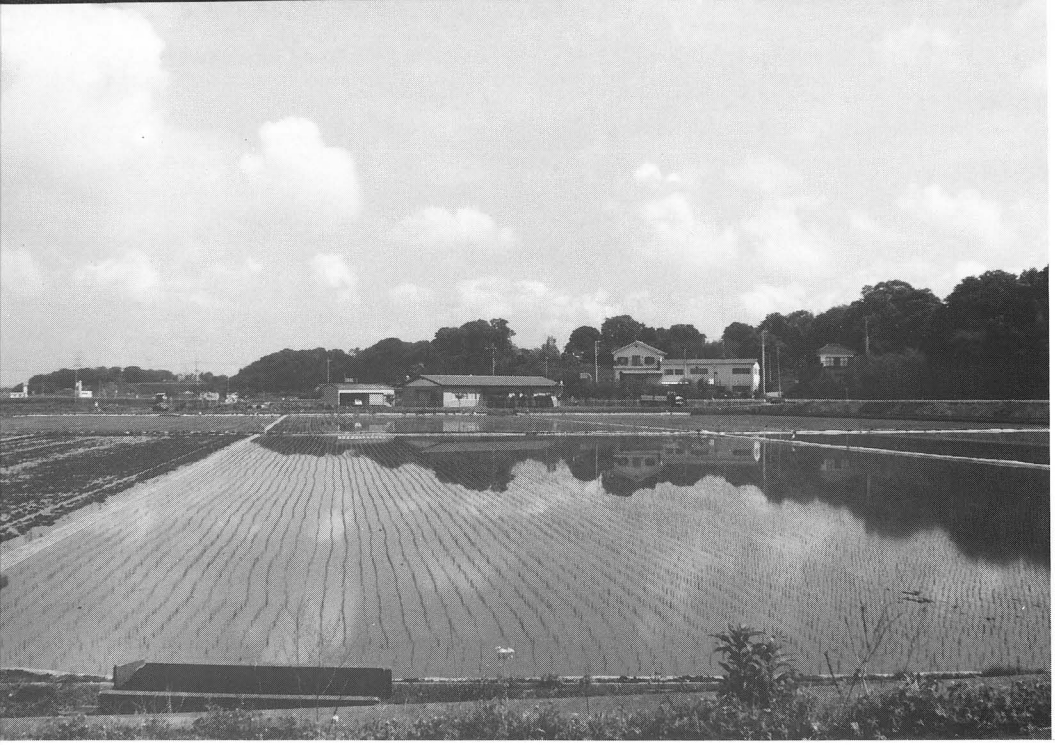


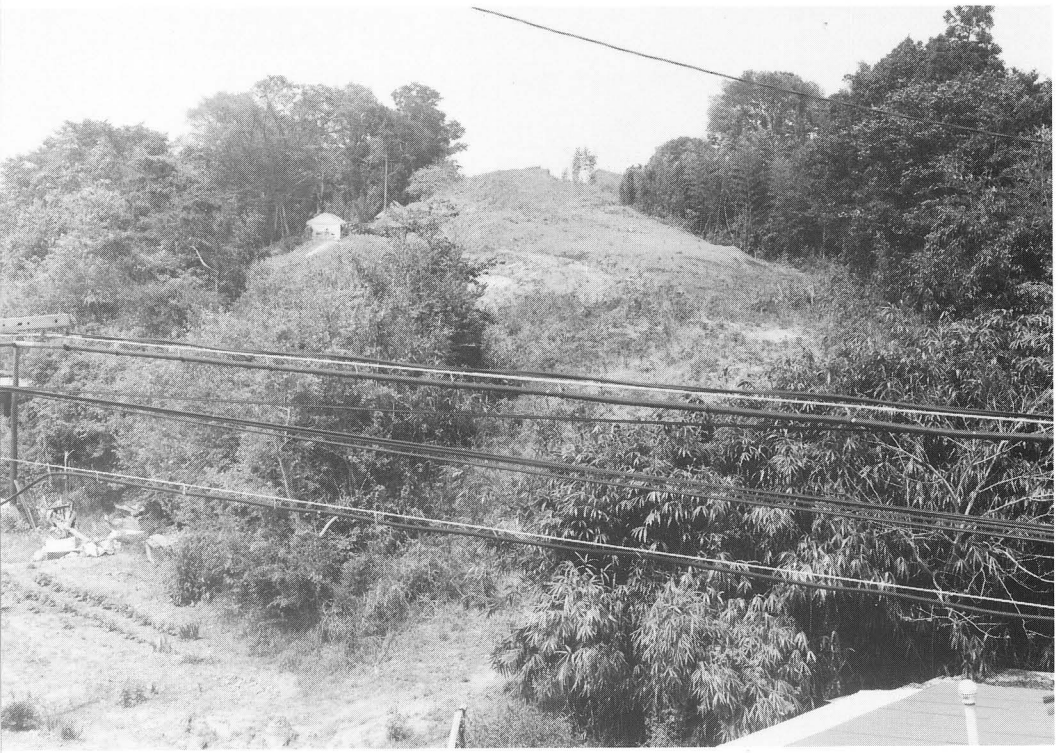
Fig. 24　灯火山古墳測量図

図　版

PL－1　調査地



遺跡遠景（中央部分）



遺跡近景（南から）

遺跡近景（南から）

PL－2　調査地

後円部（南から）

前方部（北から）

東側くびれ部（北から）

PL－3　調査前

後円部西側の墳丘状況（南から）

後円部東側の墳丘状況（南から）

後円部北側の状況（北西から）

後円部中央の墳丘状況（北から）

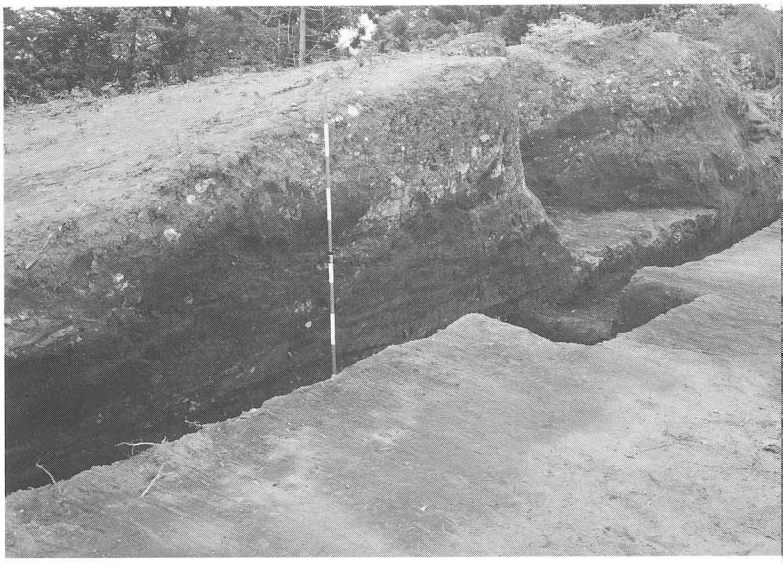
前方部東側の墳丘遺存状況（北から）

PL－4　調査前・トレンチ

西側くびれ部（北から）

第１トレンチの南側土層状況

後円部西側斜面の状況



第１トレンチの中央部土層状況

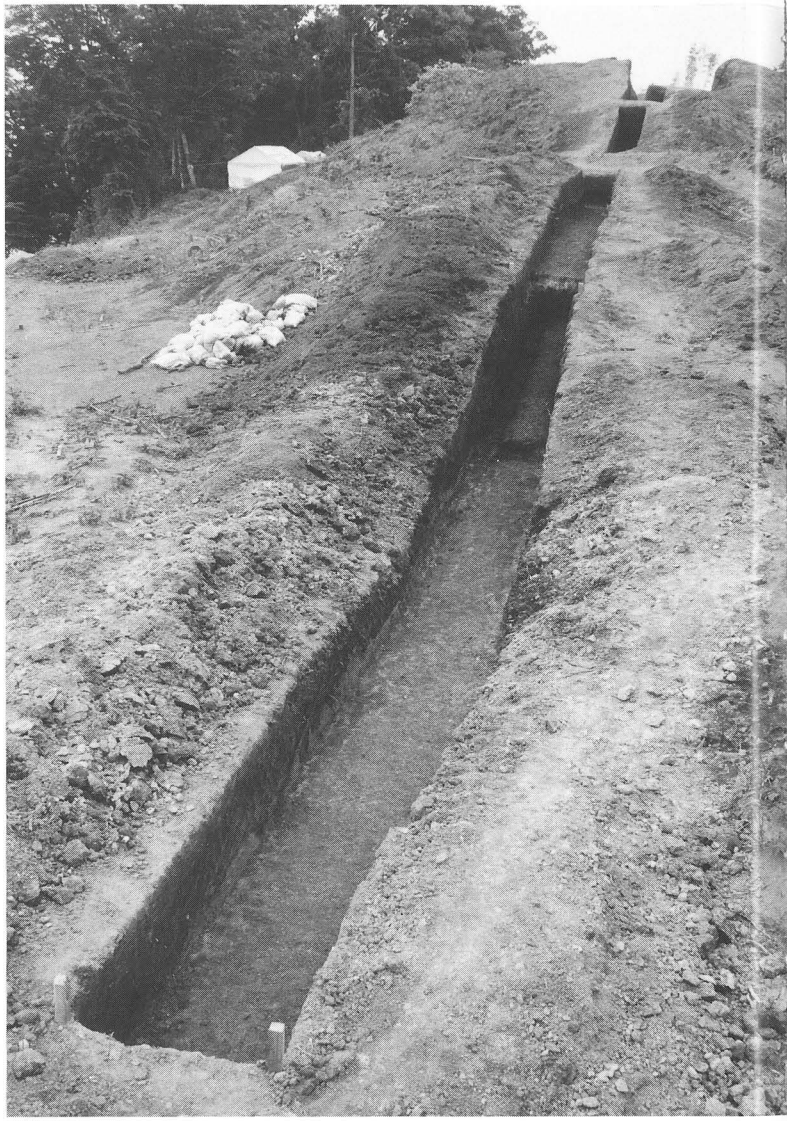
後円部墳頂付近の状況

第１トレンチの北側土層状況

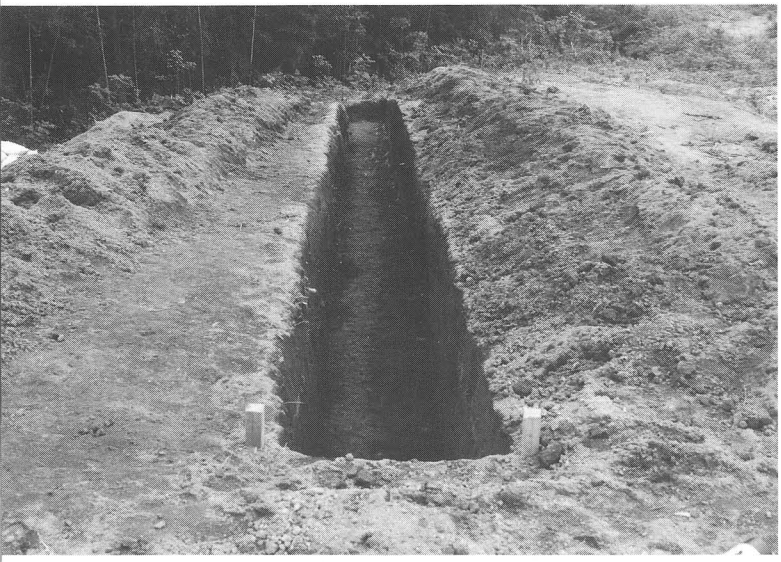
PL－5　トレンチ

トレンチの状況（南から）

第3トレンチの土層状況（前方部の裾部分）



第3トレンチ（南から）

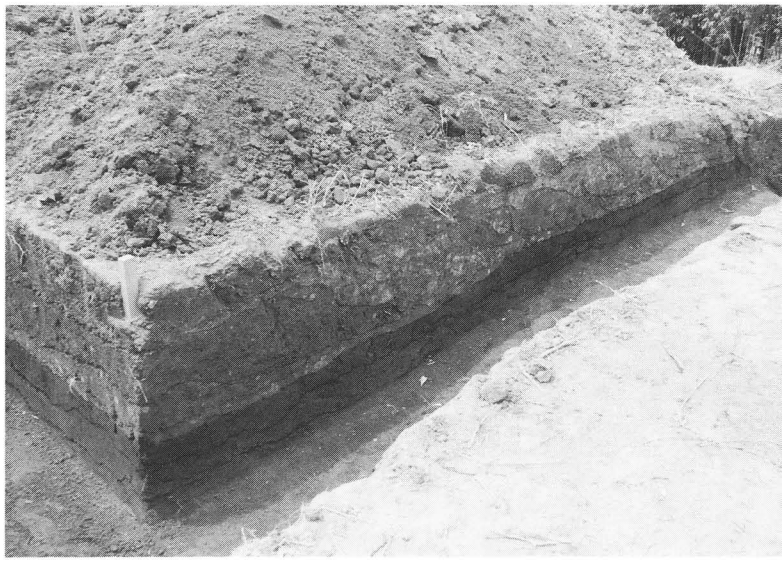


第5トレンチ（北西から）

第5トレンチの土層状況（前方部の裾部分）

PL－6　トレンチ

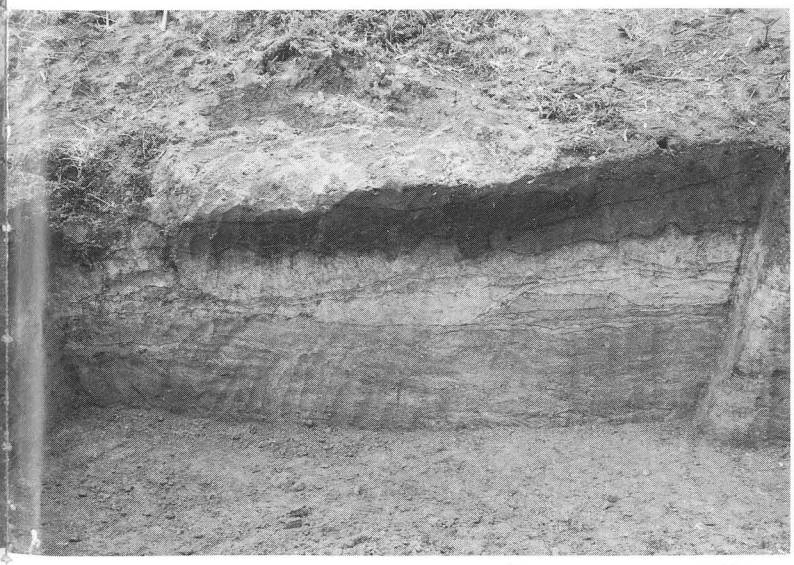
第4トレンチの状況（西から）



第4トレンチの土層状況

第6トレンチの状況（西から）

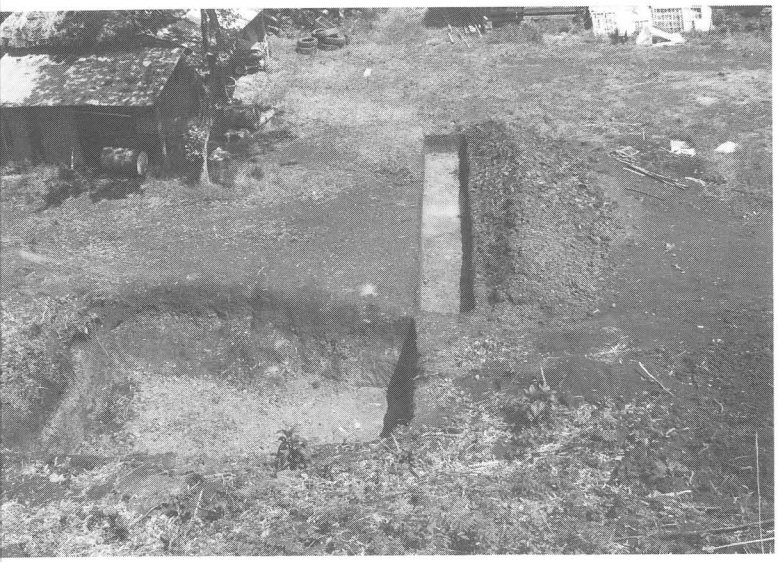
第6トレンチの土層状況



第7トレンチの土層状況

第8トレンチの土層状況

PL－7　トレンチ・調査風景



第９トレンチの状況（南から）

第９トレンチの土層状況

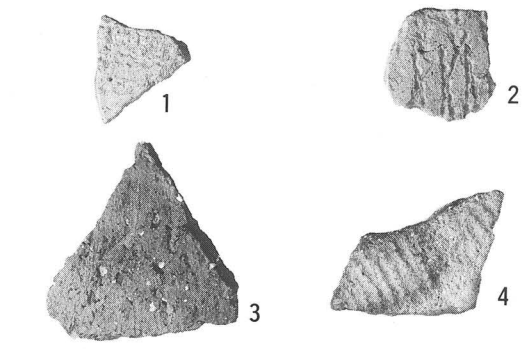
ボーリング調査風景（後円部北側）

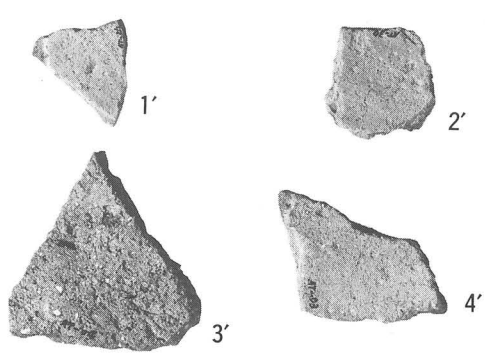
後円部北側・調査前（北から）

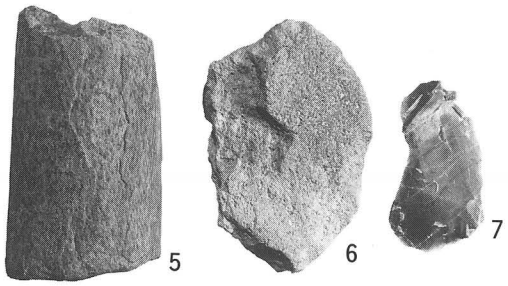
後円部北側・調査前（北から）

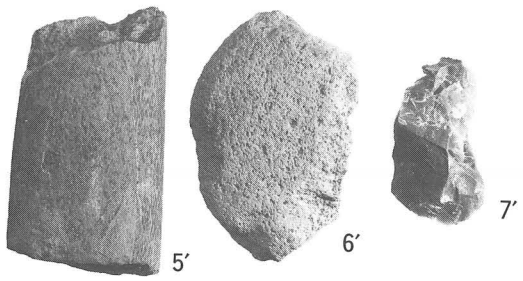
調査風景（第２トレンチ排土・他）

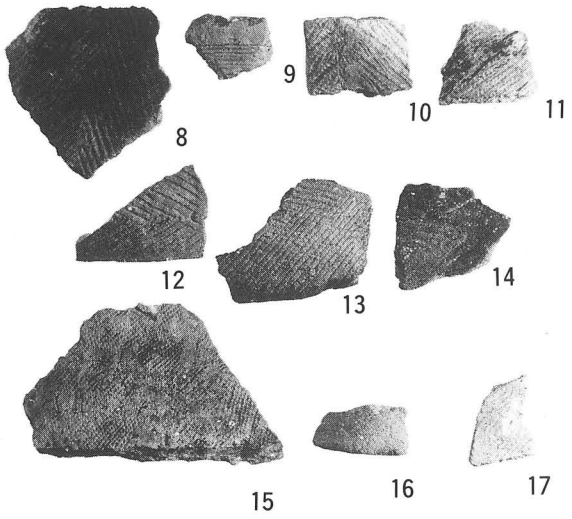
後円部北側・調査前（東から）

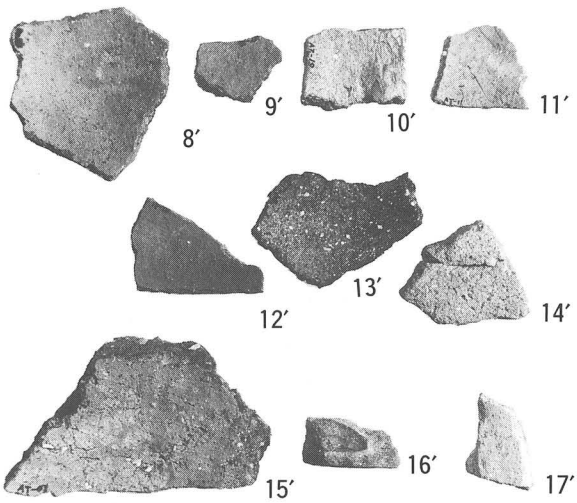


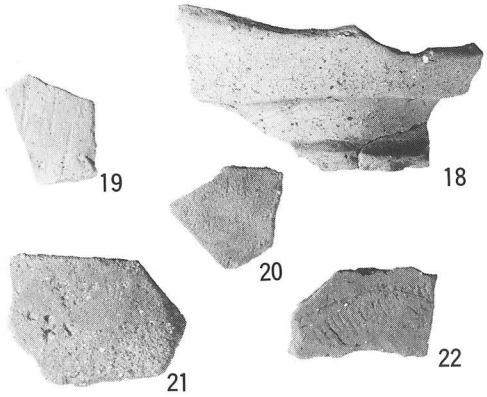












遺物出土状況（第２トレンチ内出土）

茨城県明野町埋蔵文化財発掘調査報告書第３集

灯火山古墳
確認調査報告書

印　刷　1990年12月20日
発　行　1990年12月31日©

編　集　明野町教育委員会
茨城県真壁郡明野町大字海老ケ島1300番地

印刷所　㈱　イ　セ　ブ
茨城県つくば市天久保２－11－20